

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年 4 月 28 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・M1
氏名	西本千夏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
神戸港～函館港
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
海棲哺乳類調査実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2023年4月21日 ～ 2023年4月25日(4日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
北海道大学練習船おしよろ丸, 三谷曜子教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、海棲哺乳類を研究するためのフィールドワークに必要な基礎的技術および船上で生活技術を学び、目視調査を行った。
【スケジュール】 4/21 神戸港出港、おしよろ丸の船内生活および調査方法の説明、16:30～17:30 目視調査 4/22 三重県沖、6:15～17:00 目視調査 4/23 千葉県沖、8:00～17:00 目視調査 4/24 三陸、5:15～17:30 目視調査 4/25 函館港入港、現地解散
【目視調査】 目視調査では、日の出の1時間前～日没1時間前を調査時刻とし、アッパーブリッジ(操舵室上部)およびブリッジ(操舵室)で開始時刻から終了時刻まで30分間隔でPCにて天候記録(天候、視界、見易さ、海況、海面反射、視程、海氷、場所)を行った。視界、見易さ、海面反射は5段階評価、海況は風速で評価した。天候や海況に変化があった場合は、直ちに記録更新を行った。調査は、双眼鏡または目視で行い、blow(噴気)、jump(ジャンプ)、splash(しぶき)、body(鯨体)、associated wildlife(周辺の海鳥など)を発見の手がかりとした。主に3人で目視を行い、時間ごとで順番に交代していった。1人あたり7～8時間の調査時間となるようにシフトを組んだ。
・4/21 調査方法や注意事項についての説明。1時間目視を行ったが何も観察することができなかった。
・4/22 この日は波が高く、天候が優れなかった。開始はアッパーブリッジから目視調査を行っていたが、天候が悪くなりブリッジに移動し調査を続行した。天候が回復すると再び、アッパーブリッジで終了時刻まで調査を行ったが、何も観察することができなかった。
・4/23 前日に比べ、天気が良かったが風が強かった。13時頃にハナゴンドウ5頭をLiさんが発見。右舵側60°付近、距離0.3km、body(背びれ)が見られたが、私は観察することができなかった。また、16時頃に三谷先生が水平線近くでsplashを発見したが、種の特定までには至らなかった。
・4/24 この日は波が比較的穏やかで、天候にも恵まれ海棲哺乳類を見ることができた。9時頃にキタオットセイ1頭、Liさんが発見。右舵側60°付近、距離0.4km、body(頭)、小さなオットセイを双眼鏡で観察することができ、直ちに目視記録を行った。さらに、13時頃にキタオットセイ2頭を北海道大学の海鳥チー

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ムが発見。左舵側 40° 付近、距離 0.4 km、body (鰭)、splash が見られたが、私は観察することができなかった。しかし、この日は運がよく、17 時頃にイシイルカ 4~5 頭を、三谷先生、Li さんが発見。左舵側 45° 付近、距離 0.2 km、body (背びれ)、splash、左から右に遊泳していくのを見ることができた。

この 4 日間の目視調査を通して、見られた海棲哺乳類は少なかった。事前に、通過する海域に生息する海棲哺乳類を予習したが、ほとんど見ることはできなかった。見られたとしてもほんの一瞬で、波のしぶきなのか、哺乳類のしぶきなのか区別するのが難しく、自身では発見することができなかった。また、しぶき以外に頭や背びれが見られた個体は、予習したような特長をはっきりと観察できず、距離が遠い個体は双眼鏡を通してぼやけていた。実際に経験することで、観察個体が海面からどの程度体が出し、しぶきはどのような感じで見え、どの部分で種を判別するのかを学ぶことができた。フィールドでは文献と違い必ずしもそのような特長が見られるとは限らないことを理解した。他にも、海での目視調査は天候が良くても、海面の様子は、日差しによる反射、風力、霧、波の高さなどに影響されることを学んだ。観察状況が 1 日を通して大きく変化するため、天候はフィールドにおいて重要だということを改めて認識した。特に、風が強い日は白波が多く立ったり、反射が強いときは観察に影響したりするため、天候に左右されやすいフィールドだと感じた。さらに、アッパーブリッジは遮るものが何もないため、天候によっては風や日差しが直にあたり体感温度にも影響するので、天候についての関心が高まった。天候以外にも、自分の健康状態も大切だと学んだ。船酔いによって自身の体調が優れない時、常に揺れている船からの長時間の双眼鏡観察はひどく辛く、しっかりと観察できる状態ではなかった。フィールドワークにおいて、体調は常に整えておかなければならないと思った。また、酔っている時でも双眼鏡を覗き続ける海での調査チームのすごさを知ることができた。このような、海のフィールドワークという実践的な経験を通して、文献などから得られる知識だけでなくフィールドワークにおいて重要なスキルや、大変さについて理解を深めることができた。さらに、ほとんど知らなかった海棲哺乳類の種類や、海について学ぶきっかけとなった。

【船上生活】

船上での生活は、規則正しい生活であった。朝は基本 5 時起き、夜は 21 時 (遅くとも 23 時) に就寝した。船は、24 時間稼働しており、常に誰かが船内で寝ている状態だったので、移動には音をたてないように細心の注意を払い、注意事項はしっかりと守って生活をした。1 日 3 度の食事がでて、おかずの種類も豊富であったが、味はしょっぱかった。食事の準備、片付けは担当 (食当) が決まっており、食当になった場合は、30 分前に全員分の食器や飲み物や配膳を行い、片付けは全員分の食器洗い、台ふきを行った。船酔いがひどい場合や夕食時は他の人たちに協力してもらい行った。船は常に揺れており、21 日~23 日にかけて特に揺れがひどく、酔い止め薬を飲んだが船酔いになり食事が全く食べられなかった。しかし、持参したゼリー類は食べることができたので空腹にならずに済んだ。空腹は、船酔いを悪化させるので三谷先生のアドバイスを聞いてよかったと深く感じた。また、生徒が全員船酔いでダウンしていたなかで、三谷先生は晩酌していたので感服した。船内では、陸と違い食べたいもの (特に甘いもの) を手に入れることができないため、自分の好きなものを持参することは健康面だけでなく精神面においても大事であることを学んだ。これらから、閉鎖空間である船内では、他の人と協力や自分のご機嫌取りは必須であると感じた。他にも、船内で出したごみは陸に持って帰るため、船内に圧縮する装置があることや、排泄物を飲料水レベルまで浄化できる装置が搭載されていることに驚いた。お風呂もシャワーだけでなく、浴槽がついており船の構造についても知ることができ、大変興味深かった。最終日は、次に使用する人のために自分たちが使用したお風呂やトイレ、学生部屋といった場所を掃除し、下船した。初めての船での生活は船酔いで辛かったが、想像以上に快適であり、新鮮であった。



目視調査の様子



見られたハナゴンドウの背びれ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



船での食事（夜ごはん）

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習を受け入れてくださったおしよる丸の船長をはじめとする船員の皆様、北海道大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、実習の引率と丁寧なご指導をしてくださいました三谷先生、Li さんに深く感謝申し上げます。